

湖月抄拔書「玉花紫金葉」解題

——鈴木弘道先生の覚書への贅言——

中西健治

はじめに

「玉花紫金葉」と題する写本四冊の内容については、これを購入された際に記された鈴木弘道先生の覚え書き（『玉花紫金葉』といふ写本について）があり、大いに参考になるので、まずはこれを引用させていただく。執筆は昭和二十三年一月四日。この年、鈴木先生は立命館大学法文学部第二部文学科国文学科（夜間部）に入学されたばかりで、学生である傍ら大阪府守口市立第一中学校の教諭として教壇に立たれてもいた。教材用の粗末な残り紙の裏面にペンで細かく記されているものである。

「源氏物語」中の故事・引歌について記録された諸書に関しては、既に藤田徳太郎氏の研究を始め、数多の学者の紹介発表があるが、此処に挙げるところの「玉花紫金葉」も亦、源氏物語研究史の一端に繰り入れられるべきもので、「源氏物語」中

に見える和歌の本文及び註釈を整理、列挙した珍しい写本の一つである。此の書は、最近私の手に入れたもので、四冊本から成り立ってゐるが、何れも浅緑色の表紙で、題簽は茶褐色の紙が貼られ、「玉花紫金葉」と記されてゐて、その下に各冊それぞれ一、二、三、四の巻数が附されてゐる。一葉の紙幅は縦六寸一分五厘、横四寸四分の半紙大で、普通の和紙の袋綴である。綴糸は何れも殆ど切れ、表紙はところどころ摩滅してゐるが、蠹蝨は全然見られず、汚染の程度も甚しくはない。一面十二行宛に書いてあつて、一行の字数は二十七字内外で不揃いである。歌は「源氏物語」所載のもの及び「引」の字を冠した引歌が共に上句と下句が一続きに書かれ、書体は行書の漢字を交ぜた達筆の平仮名書きで、大体「湖月抄」と同じ文字が使はれてゐる。各冊は最初に目録があり、第一冊目は「桐壺」以下「須磨」までの十二帖、第二冊目は「明石」以下「常夏」までの十四帖、第三冊目は「篝火」以下「雲隱」までの十九帖、第四冊目は「橋姫」以下「夢浮橋」までの所謂宇治十帖が収められてゐる。

次に些か變つてゐることは、「源氏物語」各帖に関する「岷江入楚」の評を「岷江ノ評」として、別の稍小さな本文と同種類の紙に書き、各帖所載の和歌及び引歌を記した頁の袋になった部分に、その紙を挿入したままになつてゐるところの多いこと、これは恐らく、全部此の書を書き終へてから尚、補説し、共に本文に綴じ込む心算であつたのではないかと思われる。さて、第四冊目の末尾にある奥書には、「延享元年甲子霜月日は久 書之（印）」とあり、而も此の印判は不鮮明であるし、「是久」なる人物については何等掛りはないが、少くとも桜町天皇の延享元年十一月（西暦一七四四）に成つたことは明白である。又、其の次に「見るからに たぐひも波にうちよする和歌の濱辺にひろふ色貝」といふ自詠の歌を以て結んでゐるが、「源氏物語」所載の和歌と引歌の記載に相応して「玉花紫金葉」と名付けられたその書名を併せ考えると、ある程度歌意が解し得られないこともない。上述の如く、本書は「岷江入楚」の評を引用する程、相当これを重視してゐるやうであるが、寧ろ「湖月抄」の中に既に引用されてゐる引歌及び和歌の註釈を何等自己の所説を交へず、そのまま無批判に孫引きして、謂はば備忘録の如き内容に終始した点、その学術的価値はさほど高いものではない。しかしながら、仮令「湖月抄」から歌に関する必要な部分を抽出整理して孫引きの形になつたとしても、その龐大複雑な、所謂「和歌の濱辺」から「色貝」を「ひろふ」とが決して容易の業でないことを考へれば、作者の努力は大い

に認められるべきであらう。而も我々が「源氏物語」中の和歌や引歌や所載の和歌を苦もなく探り当てるに際して、本書の活用される余地の十分存することも決して忘れてはならないと思ふ。

「玉花紫金葉」の解題（以下、「解題」と称する）はほぼこれに尽きている。後日、全文翻刻と詳細な検討報告の機を得たく思い、「贅言」と副題する所以である。そこで本稿としては、先生の示された見解を具体的な事例をあげて補充し、また、付加すべき若干の事項を記して、「玉花紫金葉」という写本の性格をより明らかにしたい。

一 「玉花紫金葉」と湖月抄版本との関係

「玉花紫金葉」の四冊は「解題」に記すように、季吟の湖月抄版本をもとに源氏物語の和歌及び引歌について、主としてその本文と注釈とを殆どそのまま機械的に抜き出したものである。たとえば次の通り。（括弧内は版本の丁数と表裏を示す。以下、同じ）

- ① さきの世にも御契りやふか、りけん

引君とわれいかなることをちぎりけんむかしの世こそしら
まほしけれ

② あなかちにあやしき姿にて。そほち参れる。みちかひにてだに人か何ぞとだに御らんじわくべくもあらず。

引玉はこの道かひなりし君なれどあとはかもなくならずとしらすや

(明石・二・オ)

①は湖月抄版本の桐壺卷三丁ウラの頭注に河海抄からの引歌として、②は同じく明石卷三丁オモテの頭注に花鳥余情から篁日記所載歌として、おのおの示されている記述であり、両者に共通することとしては版本本文の頭注に合点が施されている箇所であることである。「玉花紫金葉」に「引」として和歌が一首引かれている場合の殆どは湖月抄版本に示された合点を指標として抜き出されていることが確認できるのである。つまり、「玉花紫金葉」の編者である是久は、湖月抄版本を傍らに置きながら、季吟自身の学説を記す傍注よりも旧注諸説を列挙することが多いと言われる頭注部分の、しかも合点箇所に着目し、これを抜き出すという作業を、まずは意識の中心に据えていたのではないかと推測して、ほぼ誤りは無いのである。「玉花紫金葉」では、これに加えて、引歌別挙に割り込むように、源氏物語中の和歌をその冒頭に「本」として詠者名を小書したうえで一首を引用し、その後にある湖月抄の注釈の適当と思われる記述を典名を明記せずに補足する箇所もある。このように源氏物語本文を掲げてその表現の背後にある引歌を示すことと、同じく本文を掲げてそれに続く物語

和歌を示し湖月抄の注記を併記するという二つの形式が物語の展開順に織りなされている。これが「玉花紫金葉」の構成である。この綾模様によつて、本書がいかなる性格の書物であるかは明らかになろう。

そこでまず、各巻ごとに「玉花紫金葉」の丁数と袋状になった丁の間に挿入されている岷江入楚を写した紙の数、及び、湖月抄の版本の丁数と頭注の合点数、「玉花紫金葉」が収載した和歌と湖月抄との関わり等について別掲のような一覧表を作成して(論文末尾付載「参考一覧表」、本書の内容をさらに具体的に示すことにする。なお、表中でA・B・Cと分類したのは、次に例示するように、「玉花紫金葉」編集の指標が必ずしも湖月抄頭注に合点を付して示された箇所を単純に網羅する方針を採ってはいないこと、湖月抄頭注に合点が無いのに「玉花紫金葉」が引歌として一首を記している例があることなどによる。例えば次のようである。

③ ゆゆしき身

侘ぬれはつねはゆ、しき七夕もうらやまれぬ
る物にそ有ける人丸 (桐壺・十三・オ)

④ 時のまもおぼつかかりしを

抄古、身をうしと思に消ぬ物
なればかくてもへぬる世にこそありけれといふ
哥の心也細同 (桐壺・十六・ウ)

⑤ あさほらけ

師 催馬楽、妹が門やせなが門ゆき過かねてや
我ゆかはひち笠の雨もやふらんしてたをさ下

⑥ あをやぎ 略 (若紫・四十・ウ)
 細 律の哥也、青柳をかた糸によりてをけや
 鶯のをけやぬふといふ笠はをけや梅の花かさや
 催馬楽律

(胡蝶・五・オ・ウ)

右の四例は湖月抄版本に合点が施されながら、「玉花紫金葉」には引歌の扱ひを受けずに採り上げられていないものである。このような場合を、いまAとしてまとめ。また、このようなAとは逆の形式として、湖月抄版本では合点が示されていないのに「玉花紫金葉」で「引歌」として掲出されている例もある。

⑦ をのがじし 河 各競 或各自恣 引 秋風のよも
日本紀 のやまよりをのがじ、吹てちりぬる紅葉かな
オノノカシ しも (帯木・四・オ)

⑧ ゆふやみの 河 夕やみはみちたど 月まちてかへれ
 わがせこそまにもみむ (空蟬・三・オ)

⑨ 秋にもなりぬ 孟 木のまよりもりくる月の影みれば心づく
 しの秋は来にけり此歌にてかける詞也
 (夕顔・十一・オ)

⑦～⑨の場合、「玉花紫金葉」には該当箇所を含む本文が抜き出され、その後「引」として、和歌が示されている。このよう

な例をBとする。あるいはまた、次のような合点の使用例もある。

⑩ あまたさふらひ、女御三人 承香殿(中略)、更衣二人 桐

壺 後涼殿、后二人 大后弘徽殿 女院皇母 此

物語に書の所七人なり(桐壺・二・ウ)

⑪ 心あてに 細 心あてにとはをしあてにと也(中略)

或説ニ云この哥夕顔上の官女どもかの源氏氏の車を頭中将と見て

(夕顔・六・オ)

このように、湖月抄での合点自体が必ずしも和歌の引用を示しているとは限らず、⑩のように有職に関わる事項や、⑪のような「心あてに」の詠み人についての異説、或いは同じ夕顔巻の「けいめいし給て」の箇所の注記、「明星 上の詞に預りいみじくけいめいして云々それは経営也(四十二オ)」の「預り」の右傍に合点が施されている。このように合点が引歌以外の事項を示している場合をCとする。そこでA、B、Cに分類される事項の数を集計すると、Aは二二例、Bは三九例、Cは二二例となる。そもそも湖月抄の合点それ自体が主として和歌引用の際に記されるものであり、「玉花紫金葉」もそれを受けて和歌に関する合点を注目して採集する方針であることから、AとBに比べてCが少ないのは当然である。また、数のうえではAが多いのは催馬楽や神楽歌、一部分しか引かれていない和歌などを切り捨てたためかと思

われ、その逆に積極的な引歌掲出をしているのが四〇例近いBである。このことから「玉花紫金葉」編者の是久が和歌掲出という觀念に拘泥しつつ湖月抄に臨んでいたのではないかと推測されるのである。

二 「玉花紫金葉」の本文

「玉花紫金葉」は湖月抄をもとに和歌及び引歌に格段の注意を払いつつ本文とその本文中にある和歌及び引歌を重点的に列挙した書なのであるが、時には物語本文のみを抜き書きしている場合がある。帯木巻からみておこう。

⑫ 水の心ばへなど・さるかたにおかしくしなしたり・ゐ中家だつしばがきして、前裁などこゝろとゞめてうへたり・風すゞしくて・そこはかとなきむしのこゑ／＼聞えはたるしけくとびまがひておかしき程なり

(三十五・オ・『新大系』①六二頁に相当)

⑬ みなみのかうらんにそそきあけて・人々のぞくべかめり・すのこの中の程にたてたる・こさうじのかみより・ほのかにみえ給へる御ありさまを(中略)月はあり明にて・光おさまれるものから・影さやかにみえて・中／＼おかしきあけほのなり・なに心なき空の気色も・たゞみる人から・えんにもすこくもみゆるなりけり

(四十四・オ・『新大系』①七〇頁に相当)

このような湖月抄の本文のみを抜き書きしている箇所は源氏物語のすべての巻に及んでいるのではない。帯木や夕顔、若紫、須磨、蓬生、絵合などが比較的多く、とりわけ絵合では三箇所(『新大系』では一七六・一八一・一八二、三頁の地の文、物語本文を長々と引用している。あるいは少女巻の後半、『新大系』では三三三頁から三三六頁までの殆ど全文を、和歌を含めて抜き書きしている箇所もある。これは是久が、湖月抄の合点のみに着目するという指示から離れ、自身の見解をもとに抜き出しているものである。「是久」の意図がどのようなところにあつたのかについては詳細な検討を経なければならないが、総じて和歌を詠むときの参考になりそうな典型的な場面や状況、叙情的な場面描写を取り出しているのではないかとは言えるようである。なお、「玉花紫金葉」には、引用和歌の後に湖月抄所載の諸注を出典を明記しないかたちで付記している箇所もままあり、「解題」に述べられているような備忘録的要素もあり、また、歌学的嗜好を反映しているとも言えるのである。

ところで「玉花紫金葉」は版本の湖月抄からの抄出にあたって、たんに版本のみを参看したのではないことが、例えば次に示すように引用和歌の傍にまま異文が記されていることからわかる。

⑭ 引恋いこししもまだみぬ人のいひかたみ心に物のなけかしきかな
(明石巻)

⑮ 本監 君にもし心たがは、松浦なるか、みの神をかけてちかは
いよ (玉鬘卷)

⑯ 引 秋風のすずしくふけはわかせこか衣のすそのうらぞ淋しき
いハフカセ (篝火卷)

⑰ 引 浅みとり野への霞はつ、めともこぼれて匂ふかば桜かな
い野のけしほ (野分卷)

⑭は湖月抄に「一條院御製」としているものの、今日まで出典未詳とされ、伊井春樹氏編『源氏物語引歌索引』にも初句の異同については記されていず、「悲しとも」がいかなる本の参照によるものか不明ではある。また、⑮は源氏物語中の歌で『源氏物語大成』（七二六頁）によれば、青表紙本系統本では三条西家本、別本の保坂本に「しも」の本文のあることがわかるように、いかにも「君にしも」という本文のあることがわかり、「玉花紫金葉」編者はこのことを傍記したのであろう。⑯は『増注源氏物語湖月抄』に加えられた源注余滴が「爰に『秋風の』とあるは書損じなるべし」とあるように、『新編国歌大観』（第十卷）所収の「源氏注」（七五五）の初句は「はつかぜの」とある。⑰は紫の上の美貌を形容する有名な一文についての引歌で、新撰万葉集、古今六帖、拾遺集などに所収されている歌であるが、末句が「花ざくらかな」とある他、異同がつかめない。このように湖月抄頭注に記

された引歌を忠実に引き写しつつも何らかの別の本を参考しつつ異同を記しているのである。「解題」にあるように歌人・是久なる人物の見識がしめされてもいよう。先に合点について見たときにAに分類されたものの多くは和歌ではなく催馬楽や風俗歌であり、また湖月抄が純然たる和歌のみかたちで示していないものを不採用にしたのであった。つまりきわめて狭い範囲での引歌をのみみ掲出することに限定したのもまた、是久の見識ではあった。

「玉花紫金葉」は以上のとおり、湖月抄合点を追いつつも限定された範囲での引歌、物語中の和歌、そして物語本文という三種の抜き書きを物語の展開に従って列挙したものであって、「解題」に指摘されたとおり、その編集こそはまさに「和歌の濱辺」に「色貝」を「ひろふ」作業の集成ではあったのである。

三 挿入紙の「岷江入楚」が語ること

「玉花紫金葉」の袋状になった紙の間に同筆による「岷江入楚」の抜書が挿入されている。「解題」にもあるように、本書のきわだつて特異な形態であると同時に、本書が未完成の状態であることを如実に示しているものである。この挿入紙が全ての巻にあるのではなく、巻によってばらつきがあり、しかも巻の中においても最初から「岷江入楚」に絞って網羅的に抜き書きしているのでもなく、また、桐壺巻や夢浮橋巻のように詳細な抜書があることを見ると、抜書作業にやや恣意的な傾向があるようにも思え

る。ただ、その対象はほとんど、「岷江入楚」が先行注釈書に引歌として示している箇所限定されていることから、前節で推測した是久の編纂意図と併せて、彼の関心が「岷江入楚」の和歌引用の注記にも及んでいるものと判断され、その点でも「解題」の指摘するように、後日、「玉花紫金葉」と併せた形にして再編集する計画があったのではないかと推測することは許されよう。「玉花紫金葉」の花散里巻や紅梅巻の末尾に、既に「岷江ノ評」として一丁、あるいは半丁分の引用があることもそのことをよく証明していよう。このことから、「玉花紫金葉」と題する写本は、未完成の、しかも遠大な引歌集成を目論見つつも、何らかの事情のために挫折した湖月抄抜書の本であったと位置づけられるのである。

四 類書「湖月抄歌抜書」・「道慶覚書」との比較

ところで、このような湖月抄を抜き書きしたような本は他にないのだろうか。弘前市立図書館蔵「湖月抄歌抜書」（九一三・三・二二六）は、その書名からして「玉花紫金葉」と類似の書であるように思える。伊井春樹氏編『源氏物語語注釈書・享受史事典』には次のようにある。

湖月抄歌抜書 こげつしょううたぬきがき

湖月抄抜書「玉花紫金葉」解題

〔書名〕 外題に「湖月抄歌抜書」とする。

〔編者〕 未詳

〔書誌〕 弘前市立図書館蔵写一冊。

〔成立〕 江戸中期

〔内容〕 「湖月抄」から物語中の和歌の抄出と、注解の一部の抜書。初めに、各巻の冒頭に記される巻名由来等の説明文を引用し、以下詠者を付して和歌をすべて抄出していく。その末尾に「惣計七百九十四首」とする。続いて、「源氏湖月抄之詞抜書」とし、「女御后につげる女官なり無位以上三位三位なり」等と、注記の項目、内容ともに簡略化しながら抜き出す。（三五七頁）

本書は書名によってあるいは「玉花紫金葉」と同じ性質の本かと思われたのであるが、実際には、その書名のとおり湖月抄をもとにしてその所収歌にのみ注視し、詠者名の略称を記した下に和歌を機械的に二行書きに列挙している写本であった。その点では、「玉花紫金葉」のように複雑ではない。本書には少女巻と総角巻にある歌の逆順の箇所では歌の始まりの所に「下」「上」とし、椎本巻と夕霧巻にある歌の掲出順の誤りについては正当な箇所を注記していること以外は、「玉花紫金葉」に「本」として採る歌とほとんど重なっている。また、本書所収歌数を「惣計七百九十四首」としていることは、浮舟巻の「かねのをとの」の一首を脱落させているためであるが、「玉花紫金葉」に比べるとほぼ完

全に物語中の歌を収めていると言えよう。両書には共通する観点があるものの、「玉花紫金葉」の方がより広い視野に立った収載姿勢があると言えよう。

また、堤康夫氏が『源氏物語註釈史論考』の第二章『源氏物語』註釈史上の諸問題』の中の「四 道慶『湖月抄中ノ和歌集』の紹介―その『源氏物語』註釈史上の位置―」で論究されている書物も「玉花紫金葉」と同趣のものである。氏によれば、本書は源氏物語の和歌抜き書きと語彙注釈等を併せた「道慶覚書」と、伊勢物語、六家集、徒然草等の抜書を中心とする「諸本抜書」との異なった性格の内容を一冊に仕立てた本で、前者は光源氏の動向を追う筋立てと和歌の抜書で構成されているという。その根本資料として使用されたのが湖月抄であったのである。「道慶覚書」の末尾には以下のような記述があるという。

右湖月抄は五十四卷有て、吾が如き少しき身に求めがたく、大かた所持する人もまれなれば、一生見る事なくて過す、多し。されば残多く、口をしきわざこそ。漸として借り求て、此たび三たびなりけるが、そらんじ覚ゆる事はかたき事なれば、源氏の一生の其次々のくだり、又、物語の中に和歌とも書抜待て、折ふしのなくさめにせん事と、老筆の細書、見ぐるしきを、秘して他見をゆるさざる者也。

延享三年寅十一月

行年六十九歳翁道慶

(二二九頁)

道慶は湖月抄の中から和歌五二六首と物語の場面の要約記事、年立記事などを織り交ぜつつ記していったようで、堤氏によるとその方法は四類型に分けられ、さきの「湖月抄歌抜書」に重なる方法も未摘花・賢木・花散里・明石・初音・胡蝶・幻の各巻に見られるという。ただ、物語中の和歌には関心を示すものの、引歌については特に注意を払っていないように見え、その点で「玉花紫金葉」とは関心の置き所が基本的に異なっているように思えるのである。「道慶覚書」で特に注意しなければならぬのは、その奥書である。つまり、「玉花紫金葉」編纂とほぼ同時期に、いわば研究的な姿勢で湖月抄を読んでいた人物がいたという事実である。「湖月抄中ノ和歌集」においては、堤氏が指摘されるように、入手困難なうえに数次の借覧でも追いつかぬほどの湖月抄の情報量に、道慶が一計を案じて採ったのが、主に光源氏の事跡を拾うことと物語中の和歌抜書の方法を採ることであった。これに對して、「玉花紫金葉」を編纂した是久は、湖月抄の合点に目を注ぎつつ引歌として示されている和歌と物語中の和歌とを本文と共に抜き出す、いわば歌学的、鑑賞的態度で臨んだのであり、さらにその勢いを「岷江入楚」にまで及ぼそうとしていたのである。殆ど同じ時代の空気を呼吸していた道慶と是久。所こそ異なるものの、二人が湖月抄を傍に置きながら、後に続く源氏物語読者の便を考えて營々としてそれを抜き書く作業に邁進していたことは同様な仕業であったのだ。

おわりに

詳細にみればなお多くの欠陥や不備が指摘される季吟の「湖月抄」ではあるが、これが源氏物語研究に一時期を画したことは紛れもない事実である。経済的に余裕のあった階層の者は「今の世の中にあまねく用ふるは湖月抄なり」（玉の小櫛）として競ってこれを求め、宣長は門人たちにこれをもとに講義を繰り返し、一方、容易にこれを購うことのできない者は人から借覧しつつ自己流の方法で何とか控えを作成し得たのであった。「玉花紫金葉」を編纂した是久なる人物像究明を今後の課題としながらも、「湖月抄歌拔書」や「道慶覚書」のような書物が語る湖月抄の一つの読み方や扱い方は、まぎれもなく源氏物語がどのように享受されていったかを如実に示す興味ある資料であろう。

注

(1) 筑和正蔵氏「湖月抄」の註釈態度―源氏物語研究史

(四) 一「秋田大学学芸学部研究紀要・一二号・昭和三年三月」

(2) 「かねのをと」の一首を脱落させているのは、「湖月抄」がこの歌のみ二字下げとせず、地の文と同じ高さに書いていた見落とし」（稲賀敬二氏『源氏物語 註釈史と享受史の世界』二〇八頁）と考えられる。

(付記)

「玉花紫金葉」四冊の写本を鈴木先生が購入された際、先生の学生時代の恩師であった清水 泰教授に御教示を受けられた由、覚え書き末尾に付記されている。共に本学の日本文学会に御縁のある師であり、また、縁ある書物でもあろう。

なお、本稿作成にあたって国文学研究資料館の小川剛生氏の御助言をいただいたことを記し、謝意を表します。

(なかにし・けんじ 本学教授)

【参考一覽表】

卷名	湖月抄丁数	合点数	「玉」丁数	「岷江」紙数	A	B	C
桐壺	32	24	5	4	3	0	3
帶空	50	29	8	2	0	2	0
蟬	12	1	1.5	1	0	7	0
夕顔	53	44	11	1	2	1	2
若紫	53	42	9	2	3	1	0
末摘花	36	27	6.5	1	3	1	0
紅葉	32	29	7	0	2	1	0
花宴	14	13	4.5	1	2	2	0
葵	52	37	9.5	2	2	1	1
賢木	57	33	12	2	0	0	0
花散里	6	3	2.5	0	0	0	0
須磨	50	27	18	2	1	5	0
明石	47	17	10.5	2	2	3	0
滯標	38	12	5.5	1	2	0	0
蓬生	26	18	4.5	1	1	0	2
閨屋	7	5	2	0	1	0	0
絵合	23	0	4.5	0	0	0	0
松風	25	18	6.5	0	4	1	0
薄雲	37	17	5.5	0	0	1	0
朝顔	25	21	6.5	0	2	0	0
少女	56	12	7	1	2	0	3
玉鬘	48	16	5	4	2	0	0
初音	19	19	3.5	0	4	0	0
胡蝶	25	13	5.5	0	4	0	0
蛩	26	12	4	0	3	0	2
常夏	27	16	3	1	1	1	1
篝火	5	3	2	0	0	0	0
分野	22	11	3	2	4	0	0
行幸	31	9	3	1	4	0	0
藤袴	17	7	3.5	0	0	1	0
真木柱	41	15	7	0	2	1	0
梅枝	22	11	3.5	0	2	0	0
藤裏葉	27	29	7.5	2	4	0	0
若菜上	108	33	8.5	3	8	0	0
若菜下	110	25	7	2	3	1	2
柏木	45	21	4.5	2	3	0	0
横笛	21	8	2.5	0	2	1	0
鈴虫	17	6	2	0	0	1	0
夕霧	78	24	8.5	0	1	0	0
御法	22	11	5	0	4	0	0
幻	24	27	8.5	0	3	0	0
匂宮	17	14	2	0	3	0	0
紅梅	15	6	2.5	0	0	0	0
竹河	45	12	4.5	0	2	0	0
橋姬	43	28	7.5	0	2	0	5
椎本	44	31	8	0	1	0	0
総角	95	52	13.5	0	6	1	0
早蕨	21	13	6	0	1	4	0
宿木	99	51	10	0	9	0	0
東屋	68	24	5	0	3	0	0
浮舟	73	32	11	0	2	1	0
蜻蛉	60	17	4.5	0	5	0	0
手習	71	20	9.5	0	1	1	0
夢浮橋	21	0	1	3	0	0	0
計	-	-	-	-	121	39	21

湖月抄拔書「玉花紫金葉」解題

「玉花紫金葉」卷二・七十五丁才（常夏卷）

